The Japan Society of Educational Sociology

課題研究報告

II　業績主義と男らしさのゆらぎ
——マスキュリニティ研究の最前線——

報告者　森田　洋司（大阪市立大学）
本田　由紀（東京大学）
山田　昌弘（東京学芸大学）
討論者　竹内　洋（京都大学）
司　会　木村　涼子（大阪女子大学）

教育社会学における従来のジェンダー研究は，女子・女性に焦点化することが多かった。このことは，ジェンダー研究が，女性に対する差別・抑圧の解消を目標とする女性学研究の中から立ち上がったことに由来し，これまでの歴史的社会的状況の中では大きな成果を上げてきたといえる。しかし次第に，女性と男性の関係，さらには男子・男性の置かれた社会状況にも視点を広げることが求められつつある。そこで，本課題研究では，教育現場や労働市場・結婚市場における男子・男性をめぐる問題状況に注目し，考察の対象とした。

さらに，本課題研究では，現在広く関心を集めている教育問題や社会問題をとりあげ，マスキュリニティ概念の導入による新たな分析可能性を探った。長期化する不況下，労働と教育をとりまく状況は大きく変化している。その中で，業績主義を基軸とした社会システム，さらに業績主義と分かちがたく結びついていた「男らしさ」の概念もまた，修正を迫られている。したがって，教育や労働の場において業績主義的な価値観や行動様式が崩壊しつつある状況を捉え，それらが教育現場や労働市場，家族の構造や相互関係にもたらす影響を考察する上で，マスキュリニティという概念は有効ではないかと考えたのである。

第一報告では，森田洋司氏（大阪市立大学）が，「不登校とジェンダー」と題して，不登校現象のジェンダー分析を試みた。氏は，まず初めに，不登校に関しては，男女別の公式統計が皆無であり，これまで統計的な性差が一般的な知見として提示されたことがなかったこと，したがって，個別事例の分析を除き，ジェンダーの視点に基づく不登校研究が存在しなかったことを指摘する。このことは，不登校現象がジェンダーと関連するものとして捉えられてこなかったことを示すとともに，公式統計の有無が私たちの研究の方向をいかに規定しているかということを改めて認識させてくれる。

さて，森田氏は，そうしたデータの不足や限定性を断りつつ，不登校の出現率に性差が見られること（男子＞女子），また近年，その性差が縮小する傾向にあることを指摘する。そして，「不登校の脱逸

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

脱化」の進行により，一般的に不登校は増加傾向にあるが，その過程でジェンダーによる選択的な作用(フィルタリング)が働いたため，性差縮小の傾向が生じたのではないかと推論する。さらに，不登校とジェンダーの関係のさらなる分析のためには，「不登校問題」を進路形成問題として捉え，労働市場との関わりからジェンダー役割との関係を検討することが重要であると主張する。

次に，本田由紀氏（東京大学）が，「男性フリーターの行方」と題して，男性フリーターの現状と将来の可能性について考察を行った。本田氏は，まず，階層的にもジェンダー構造的にも排除された男性フリーターの現状を示した。また，既存データの分析を通じて，男性フリーターが，「企業社会」的でないルートで職業的地位達成を目指す「野心型」と，地位達成志向そのものを持たず現状に留まろうとする「安住型」に分化していること，「野心型」は，一定の経済力をもちながら，ジェンダー意識が極めて保守的，一方で「安住型」は，ジェンダー意識は保守的でないが，経済的に厳しい状況にあることを明らかにした。

さらに本田氏は，夫婦2人で1.5 人分の賃労働を行い，家庭生活との両立を模索する「1.5 働き社会」を，労働のあり方とジェンダー問題の両者を解決するための将来ビジョンとして提示し，その実現という観点から，労働やフリーターの現状がどのような問題と可能性をはらむかを考察する。「希望のシナリオ」は，労働政策やジェンダー意識の変革による「1.5 働き」の実現だが，「絶望のシナリオ」は，ジェンダー格差や社会格差の拡大・固定化であり，今の日本社会は，どちらにも進みうる微妙な曲がり角にある，と氏は指摘する。

最後に，山田氏が，「雇用，恋愛システムの変容と男性のゆくえ」と題した報告を行い，恋愛・結婚のシステムを，「ジェンダーと教育」研究やフリーター研究に組み入れることの重要性を指摘した。従来の研究は，労働システム，キャリア形成問題を中心に理論を組み立てているが，恋愛システムの中での有利／不利といった問題は発達過程の青少年において非常に大きな問題であり，また，とりわけ男性は，「できること」と「もてること」に強い連動が見られることから，恋愛システムを考慮に入れた分析が不可欠，というのである。

そして，そうした観点から見た場合，高度経済成長期は大多数の男性にアイデンティティを保証してきたが，現在の経済・恋愛システムは，「できない＝もてない男性」を厳しく排除するものであり，彼らは将来の見通しを全く持てない状況になっていると問題化する。

これらの報告に対し，討論者の竹内洋氏（京都大学）やフロアーから多くの質問やコメントが寄せられた。森田氏に対しては，不登校の出現率や卒業後の就労におけるジェンダーと階層の複合的な影響についての問題提起があり，今後の課題として確認された。本田氏に対しては，「野心型」「安住型」それぞれの文化・戦略について意見が交された。「野心型」とポール・ウィリスの「野郎ども」との相同性が指摘されたほか，「安住型」のジェ

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

ンダー意識の希薄さをどう解釈するかについては，複数の見解がみられた。竹内氏が，単なる無責任さの表れにすぎないのではないかと述べたほか，フロアーからも自己肯定のための戦略とみる見方が示された。山田氏とのやりとりの中では，「できること」の多義性，さまざまな「できること」の，男性の競争システムの中での布置関係，「できること」と「もてること」の結びつきの様相，その変化の可能性など，さまざまな論点が提出された。

時間の制約もあり，包括的な議論にまでは至ることができなかったものの，家族・学校・労働市場・恋愛市場という一見別個のシステムをつなぐものとして，マスキュリニティという概念，もしくは男女の関係性をも視野に入れたジェンダー概念が極めて有効であることは，確認できたように思われる。

研究部の予測を超える参加人数に，この問題に関する関心の高さを知ることとなった。今後も，男子・男性を対象とする研究，男女の関係性を切り口に立体的に教育問題・社会問題を読み解くような研究が，多様な角度からなされることを期待したい。

（文責：上田智子）

NII-Electronic Library Service